



二重思考

一九八四年

戦争は平和なり 自由は隷従なり 無知は力なり——

あなたはふと、一人でいたいと思ったことはないだろうか？ 少し疲れた時、考え事をしたい時、一人でいたい気持ちになって、誰の目も気にしない自由なひとときを楽しむ。そのような時間は何事にも代えがたい大切なものである。だが、もしそういう時間が奪われたらどうだろうか？

今回紹介する『一九八四年』は、〈ビッグ・ブラザー〉率いる党によって一党独裁支配された仮想のロンドンの物語である。そこでは人々の生活すべてが監視された、全体主義的な管理社会が成立していた。人々は党の言う通りの行動をとるように強いられ、党に服従しない者は処罰される。監視装置が各人の部屋の中にまで設置されているので、人々にプライバシーなど全くない。

単にプライバシーがないだけでない。心の中で自由に思考することさえ危険である。党による監視は24時間365日ずっと行われるため、思考したことがちょっとした仕草に表れれば、たちまち捕まってしまうからだ。そのため人々は次第にリスクを恐れて自由な思考を放棄し、党の「統治が上手くいっている」という発表を鵜呑みにしていく。そして、現実と発表が異なることに疑問を抱かなくなっていくのだ。冒頭に挙げた「戦争は平和なり 自由は隷従なり 無知は力なり」というのは党のスローガンで、人々に二律背反の事象を同時に受け入れさせ、思考の放棄を強制するものである。党の中核の権力は絶対的なものであり、大多数の人間はそんな統制された社会を受け入れ、生きてきたのだ。

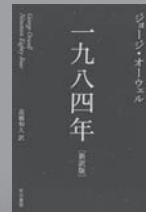
こんな社会体制はおかしいのではないのか？ 常に監視され、権力が集中し、現実がないがしろにされている現状、果たして党の支配は本当に上手くいっているのか？

そんな風に疑問を抱いた党の役人、ウィンストンは党の支配に抗い、自由を手に入れようとする。党の支配する社会体制に立ち向かい、次第に反政府地下組織とも関わりをもつようになる。そして、現在の社会体制を深く知るにつれて彼はこの支配の仕組みの堅牢さと救いがたさを理解していく……。

あまり現実的でない舞台設定でありながらも、細かいところまでリアリティのある描写がなされており、しっかりした質感を持って物語が迫ってくるこの作品。読み進めるにつれて、自然にウィンストンと自分自身の感覚が同期して、ともに苦しみ、ともに党の中核に抗って戦っているように感じるのだらう。果たして彼の進む先に党の支配のない自由な世界はあるのだろうか？ 彼らの物語を追いかけてながら、ぜひ一緒に「自由」の意味を考え直してみしてほしい。

『一九八四年』

著者	ジョージ・オーウェル
訳者	高橋和久
出版社	早川書房
価格(税別)	860円



S = 2 + 2

(思考犯罪が) 即ち死なのだ

はみだし
すてーじ

2017は306番目の素数です。ちなみに次の素数は2027です。
⇒ちなみに2016は405番目のハーシャッド数でした。

(農・1 こっこ)
(でもハーシャッド数って何? ; 編)